

三輪

前シテ 里女
後シテ 三輪明神
ワキ 玄賓僧都
間狂言 三輪の里人

1 ワキが登場し、自分の住まいに毎日、の水を持つてくる女性がいることを述べる。続いてシテが登場し、ワキに衣を請う。

ワキ／これは三輪の山陰に住まいする僧都そうずにて候。ここにいづくとも知らぬ女性。毎日しきみあか密闕伽の水を持ちて来り候。今日も参りて候はば。を尋ねばやと思ひ候。

シテ／三輪の山本道もなし。三輪の山本道もなし。檜原ひばらの奥を尋ねん。げにや老少不定ろうしやうふじやうとて。世の中々に身は残り。幾春秋をか送りけんあさましや。為すこと無くて徒らに。憂き年月を三輪の里に。住まひする女にてさむるふ。またこの山陰に玄賓僧都とて。貴き人の御入り候程に。いつも密闕伽の水を持ちて参り候。今日も又参らばやと思ひ候。いかにこの内へ案内申し候。

ワキ／山頭さんとうには夜孤輪よるこりんの月を戴き。洞口には一片の雲を吐く。山田守るそほづの身こそ悲しけれ。秋果てぬれば。訪ふ人も無し。

シテ／此の内へ案内申し候。

ワキ／案内申さんとは又いつも密闕伽の水持ちて来る人か。

シテ／山影門に入つて推せども出でず。

ワキ／月光地にて掃へども還生ず。

シテ・ワキ／鳥聲とこしなへにシテ老生と閑なる山居。

地謡／柴の編戸を推し開き。かくしも尋ね切密罪を助けてたび給へ。秋寒き窓の内。秋寒き窓の内。軒の松風打時雨木の葉搔き敷く庭の面門は葎や閉ちつらん。下樋の水音も苔に聞こえて静かなるこの山住みぞ寂しき。

シテ／いかに僧都へ申すべき事の候。

ワキ／何事にて候ぞ。

シテ／妾に御衣を一衣賜り候へ。

ワキ／易き間の事此の衣を参らせ候。

シテ／あら有難や候。さらば御暇申し候。

ワキ／暫く候。此程密闕伽の水を持ちて来り給ふ志。返す返す有難ふ候。さてさていづくに住み給ふ人ぞ栖を御明し候へ。

シテ／妾が栖は三輪の里。山本近き處なり而も我が庵は。三輪の山本恋しくはとは詠みたれども。何しに我をば訪ね給ふべきさりながら。猶も不審に思し召さば。訪ひ来ませ。

地謡／杉立てる門をしるべにて。尋ね給へと云ひ捨てて。かき消す如くに失せにけり。(中入)

註 そほづ 案山子のこと。僧都にかけた。

2 間狂言が登場し、三輪大社に参詣する。御神木の一の枝に衣が掛かっているので不審に思つてよく見ると、どうやら玄賓僧都のものらしいことに気付く。玄賓の庵に行つて、そのことを告げるとワキは思い合わせるがあると言つて、三輪明神へと赴く。

ワキ／この草庵を立出でて。この草庵の立出でて。行けば程無く三輪の里近きあたりか山陰の。松はしるしも無かりけり。杉叢ばかり立つなる。神垣はいづくなるらん。神垣いづくなるらん。不思議やなこれなる杉の下枝を見れば。ありつる女人に與へつる衣の掛りたるぞや。寄りて見れば衣の褌に金色の文字据れり。讀みてみれば歌なり。三つの輪は清く清きぞ唐衣 くると思ふな 取ると思はじ

3 作物の中からシテがまず声を発し、続いて姿を現し、三輪の神婚説話を語り、天の岩戸の神樂の様を表す。

シテ／ちはやふる 神も願の有る故に 人の値遇に遇ふぞ嬉しき

ワキ／これなる杉の二本より。妙なる御聲聞えさせ給ふぞや。同じくは末世の衆生の迷いを照らし。御姿を拝まれおはしませと。念願深き感涙に墨の衣を濡すぞや。

シテ／恥づかしながら我が姿。上人にまみえ申すべし罪を助けてたび給へ。

ワキ／いや罪科は人間にあり。これは妙なる神道の。

シテ／衆生済度の方便なるを。

ワキ／暫し迷の。

シテ／人心や。

地謡／女姿と三輪の神。女姿と三輪の神。ちわや禪掛帯引替へて。唯祝子ほおりこが着すなる。烏帽子狩衣。裳裾もすその上に掛け。御影あらたに見え給ふ 忝ちがなの御事や。

シテ／それ神代の昔物語は末代の衆生の為。

地謡／済度方便の事業。品々以つて世の為なり。

シテ／中にもこの敷島は。人敬つて神力増す。

地謡／五濁の地利に交はり。暫し心は足曳の大和の國に年久しき夫婦の者あり。八千代を籠めし玉椿。変らぬ色を。頼みけるに。されども此の人。夜は来れども昼見えず。或夜の睦言に御身如何なる故に因り。かく年月を送る身の。昼をば何と烏羽玉の。夜ならで通ひ給はぬは。いと不審多き事なり。唯同じくは長へに。契を籠むべしとありしかば。彼の人答へ云ふやう。げにも姿は羽束師の洩りてよそにや。知られなん。今より後は通ふまじ。契も今宵ばかりなりと。懇に語れば。さすがわかれの悲しさに。帰る處知らんとて。苧環に針を附け。裳裾にこれを綴じ附けて後を控へて慕ひ行く。

シテ／まだ青柳の糸長く

地謡／結ぶや速玉の己が力にささがにの。糸繰り返し行く程に。此の山本の神垣や。杉の下枝に止りたり。こはそもあさましや契りし人の姿か。其の糸の三縮残りしより。三輪のしるしの過ぎし世を。語るにつけて恥づかしや。

地謡／げに有難き物語。聞くにつけても法の道。尚しも頼む心かな。

シテ／さらば神代の物語。委しくいざや現し彼の上人を慰めん。

地謡／まづは磐戸の其の始。隠れし神を出さんとて。八百萬づの神遊。これぞ神樂の始なる。シテ／ちはやふる。

シテ／天の磐戸を引き立てて。
地謡／神は跡無く入り給え。常闇の世とはやなりぬ。
シテ／八百萬づの神達。磐戸の前にてこれを嘆き。神樂を奏シテ舞ひ給へば。
地謡／天照大神其時に磐戸を少し開き給へば。又常闇の雲晴れて。日月光り耀けば。人の面白々と見ゆる。
シテ／面白やと神の御声の。
地謡／妙なる始めの物語。
シテ／思へば伊勢と三輪の神。
地謡／思へば伊勢と三輪の神。一体分身の御事。今更何と磐座や。其の関の戸の夜も明け。かく有難き夢の誥。覚むるや名残なるらん。覚むるや名残なるらん。

註

禪 巫女の着る服。白布で身二幅袖一幅で作る。

掛帯 裳の腰につけた広紐で肩に掛けて結ぶ。

祝子 神に齋きまつる職。巫(かんなぎ)。

裳裾 裳は腰より下に着ける衣。裳裾も裳と同義。

敷島 和歌のこと。「三つの輪は」の歌を指す。